Ⅱ　前川遺跡発掘調査

1.　調査の契機と経過

前川遺跡は，昭和47年３月財団法人奈良県開発公社がおこなった前川筋河川局部改良工事に伴って発見されたものである。前川は，春日山麓に源を発する岩井川から分水した農業灌漑用の水路であり，奈良市杏町・大和郡山市三橋町から地蔵院川を径て佐保川に流れ込む流路をもつ。改良工事は，奈良市郊外の都市化現象や工場団地建設の影響をうけ，前川が下水道化したため，大和郡山市側を経由せず奈良市側で直接佐保川に流す水路変更を目的としていた。このため，奈良市杏町からかっての平城京東一坊大路沿いに南下する前川を，平城京九条大路付近で西折・西流させ佐保川に流す目的で，東西約500ｍ，幅13ｍ，深さ４ｍの用水路を新たに掘鑿した。

前川筋河川改良工事がおこなわれていた頃，西方約500ｍの地点にある平城京羅城門跡では，大和郡山市教育委員会の依頼をうけた奈良国立文化財研究所が発掘調査をおこなっていた。このことに関連してたまたま工事現場に立ち寄った岸俊男氏や発掘調査関係者によって前川遺跡の存在が明らかになった。遺跡発見時においては，河川の掘鑿はほぼ終了しており，揚土中に多量の遺物が含まれていることが注意された。奈良国立文化財研究所では，遺跡遺物発見届を提出するとともに奈良県教育委員会と連絡をとり，応急の調査を実施した。調査は，３月11日から４月12日まで実施し，揚土中に含まれる遺物の採集と工事用法面や川底に残存する土壙および井戸などの遺構についておこなった。調査は工事と平行して実施し，そのうえ遺構の大半が破壊されていたため充分なものといえず，遺構の実測についても，一部を除いては地点を記録したにとどまった。

2.　遺跡の状況

前川遺跡は，大和盆地の北半部ほぼ中央，奈良市西九条町スゲハラ付近に所在する。遺跡周辺の現地表面標高は51ｍである。遺跡の西側には，秋篠川と合流した佐保川がほぼ北から南へ流れている。佐保川の両岸には10年前までは水田地帯がひろがっていたが，ここ数年来，北からは工場が，南からは住宅がしだいに押しよせてきて，付近の景観は変貌しつつある。

遺跡は平城京羅城門跡の東約500ｍのところにあり，その位置は，ほぼ九条大路上にあたる。多くの遺物と遺構を認めたところは，九条大路が東一坊大路と交わる所から西へ約50ｍの地点であり，また九条大路と東一坊坊間路との交叉点付近からも多くの瓦が出土している。以下確認した遺構について概略を説明しておきたい。

遺構は，東西方向に掘られた用水路の側壁と基底部において確認した。側壁の土層の観察によって南側で３個所，北側で５個所の計８個所で，遺物を多量に含む黒色土の落ちこみを認めた（ＰＬＡＮ ３，Ｐ１～Ｐ８）。工事の関係上，遺構の性格を確かめるまでには至らなかったが，

遺物の出土状況から土壙と考えられよう。またこれ以外に基底部では，２基の井戸を確認した（PLAN ３，E１･E２）。しかし，すでに一部で導水がはじめられ，調査期間中再三の降雨があったため，遺物を取りあげた直後に，井戸枠は崩壊し，井戸遺構については充分な記録をとることができなかった。なお遺構の番号は発見順位につけた。

土壙１　地表面下約50cmから掘りこまれた袋状の土壙（口径0.7m，底径1.0m，深さ0.5m）である。覆土中には炭化物を含み，土師器の杯が重なった状態で多量に出土した。

土壙２　地表面下約30cmから掘りこまれたほぼ円形の土壙（径約1.0m，深さ0.5m）である。土師器の皿・杯，須恵器杯などが出土している。

土壙３　地表面下約30cmから掘りこまれた土壙（径1.0m，深さ1.2m）である。遺物の出土量も少なく，柱穴かとも考えられるが，柱および柱痕跡などは発見できなかった。

土壙４　地表面下約30cmから掘りこまれた円形を呈する土壙（径約2.0m，深さ0.3m）である。土器の出土は少なく，土馬が約20個体分出土した。原形を完全にとどめるものはない。

土壙５　地表面下約30cmから掘りこまれた土壙（径約0.5m，深さ0.3m）である。土師器の杯や皿が多量に出土した。

土壙６　地表面下約15cmから掘りこまれた土壙（径約0.5m，深さ0.3m）である。土師器杯や須恵器壺などが出土しているが，全体に遺物の量は少ない。

土壙７　地表面下約１mから掘りこまれた土壙（径約0.5m，深さ0.3）である。土馬，土師器皿と杯が出土している。

土壙８　地表面下約１mから掘りこまれた土壙（径約0.5m，深さ不明）である。土師器皿・杯などの遺物が出土している。

井戸１　一辺に各２枚の板を縦に連ね，四隅に丸木の支柱を配し，その支柱を横桟で固定した方形の井戸である。一辺約80cm，深さ現存1.7mをはかる。井戸底には砂を敷き，曲物を据える。縦板は幅約40cm，厚さ３cmであり，支柱と横桟には径10cm前後の丸太材を用いる。

井戸２　井戸１と同様の構造をもつ一辺約80cmの方形の井戸である。縦板には幅50～約60cm，厚さ５cmの板と幅30～20cm，厚さ２cm前後の板との２種類があり，一辺に各１枚づつを組合せて井戸枠としている。底には礫が敷かれている。現存の深さは2.2mをはかる。

（岡本東三）

3．遺　物

前川遺跡の２基の井戸，８ヶ所の土壙から総数約80箱の土器類を得た。井戸出土土器・土壙出土土器はともに天平末年頃の良好な一括資料である。

ここでは瓦は出土していないが，調査地の西方約200mの工事現場揚土中から若干の瓦を採集している。

A．井戸出土土器

井戸は２基あるが，いずれも土器群の示す器種・手法を同じくしているため，ここでは一括して報告する。井戸出土土器には土師器・須恵器がある。他に墨書土器３点と土馬２点がある。出土のほとんどが土師器であり，須恵器は微量である。出土土器は全般に遺存状況が良好

である。とくに土師器類は黄赤色硬質で，器面はまったくといっていいほど荒れていない。また，煤の付着することの通常な甕類など煮沸形態の土器のほとんどには煤その他の使用痕跡は見られず，製作当時の状況をとどめている。若干量を占める須恵器類を除いて，井戸出土土器は未使用のものであったと言えよう。

土師器　井戸出土の土師器には，杯A・皿A・皿B・皿C・椀A・椀C・蓋A・高杯A・盤A・鉢A・鉢C・鉢D・鉢X・壺D・甕A・竈がある。

a. 杯AⅡ(1～5)　口径21.4cm～19.6cm，高さ4.1cm～3.7cm。平らな底部と外傾する口縁部からなる。口縁部は屈曲し，端部を内側に巻き込む。2・3・4・5は底部内面を撫で，口縁部内外面を横撫でで調整し，底部外面を調整しないa手法で作り，3の底部外面には木葉痕をとどめる。1は底部外面のみを篦で削って調整するb手法で作る。口縁部外面に篦磨きを行なうものが1例ある。内面の底部に2重の螺旋暗文と口縁部に一段の放射暗文を施すものが多いが，底部内面に2重の螺旋暗文のみを旋すものが1例ある。

b. 杯AⅢ(8～11)　口径17.7cm～17.2cm，高さ3.4cm～2.8cm。法量の差のみで，形態・手法とも杯AⅡと変らない。8～10はa手法で作り，8・10の底部外面には木葉痕がつく。11はb手法による。

c. 杯AⅣ(14～22)　口径16.0cm～13.8cm，高さ3.2cm～2.5cm。口縁端部の巻き込むものがほとんどであるが，巻き込みのわずかなものや巻き込まず外反するものもある。すべてa手法で調整し，14の底部外面には木葉痕をとどめる。暗文は2重螺旋暗文＋1段放射暗文である。22は須恵器杯Aと似た特殊な形態をもつ。口径13.8cm，高さ3.5cm。

d. 皿AⅠ(24～28)　口径23.8cm～22.6cm，高さ3.0cm～2.5cm。平らな底部と短い口縁部からなる。口縁部は屈曲し，端部は巻き込む。25～28はa手法で作り，底部外面には木葉痕をとどめる。24はb手法で作る。暗文のないものが1例あるのみで，他はすべて螺旋暗文＋1段放射暗文を施す。

e. 皿AⅡ(6・7)　口径18.2cm～18.0cm，高さ3.2cm～2.8cm。端部が薄く外反するものと，わずかに屈曲し，端部内側の凹むものとがある。いずれもa手法で作り，内面に2重螺旋暗文＋1段放射暗文を施す。

f. 皿AⅢ(12・13)　口径16.9cm～16.1cm，高さ3.2cm～2.9cm。口縁端部が薄く外反するものとわずかに屈曲し，端部の巻き込むものとがある。いずれもa手法で作り，暗文はない。

g. 皿B(38・39)　口径33.2cm～32.2cm，高さ5.1cm～3.5cm。皿Aに高台のついたものである。口縁部は屈曲し，端部は巻き込む。b手法で調整し，39の口縁部外面には粗い篦磨きを施す。38には螺旋暗文＋1段放射暗文を施すが，39では放射暗文を2段に施し段間に連弧暗文を配する。

h. 皿C(33)　口径11.3cm～11.2cm，高さ2.5cm～2.1cmの小形の皿である。平坦あるいはわずかに丸味をおびた平らな底部と，外反する短い口縁部からなり，端部は外反する。内面を撫で，口縁部内外面を横撫でによって仕上げるが，横撫での範囲は狭く，底部にまで至らない。

i. 蓋A(23)　わずかに丸味をおびた弓形の頂部に上部の平らな偏円形のつまみのつくものである。縁部を折り曲げて内側に突出させる。外面に密な篦磨きを施し，内面には2重の螺旋暗文をつける。口径21.8cm，頂部の高さ3.0cm。

j. 椀A(30・31)　小さな底部と内弯する口縁部からなり，縁端部はわずかに外反する。30では端部以下の外面を篦で削って仕上げるが，31では調整しない。外面全体を密に篦で磨く。口径12.9cm～11.9cm，高さ4.8cm～3.5cm。

k. 椀C(34～37)　口径13.8cm～13.1cm，高さ4.6cm～3.4cm。丸い底部と外反する短い口縁部からなる。内面を撫で，口縁部内外面を横撫でで調整し，以下の外面は調整しない。

l. 盤A (44)　口径24.3cm，高さ7.0cm。平らな底部と大きく開く口縁部からなる。口縁部は外反し，端部上端が突出する。内面及び口縁外面を横撫でで調整し，以下の外面は粗く篦で削って仕上げる。

m. 高杯A(45・46)　杯部の破片のみである。浅い杯部に短い脚部のつくものであろう。杯縁部はわずかに外反し，端部は内側に突出する。45には螺旋暗文と1段の放射暗文を施す。口縁部内外面を横撫でし，以下の外面を篦で削る。外面を井状に4区割りに篦で磨く。口径29.6cm～26.8cm。

n. 鉢A(40～43)　口径20.4cm～18.6cm，高さ8.0cm～5.8cm。平らな底部と内弯する口縁部からなり，口縁端部を巻き込む。内面を撫で，口縁部内外面を横撫でし，以下の外面を調整しないものが一般的であるが，43は口縁部下半の内面を刷毛目で調整し，41は縁端部以下の外面を篦削りする。40・41の外面全体には3区割りの密な篦磨きを施す。

o. 鉢C (32)　逆三角形状の手づくねの小形の器で，口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面を横撫でする。口径10.1cm，高さ4.2cm。

p. 鉢D (47)　口径27.6cm，高さ15.3cm。肩部のまるく張った下すぼまりの体部と外反する短い口縁部からなる。底部に高台がつく。内面を撫で，口縁部内外面を横撫でし，体部外面を篦で削って調整する。底部外面を除く外面と口縁部内面を密に篦で磨き，体部内面には粗な篦磨きを施す。

q. 鉢X(48～50)　底部にむかってゆるやかにすぼまる円筒形の体部の上端を外反させて口縁部としたものである。体部中ほどに一対の三角形折曲把手がつく。口縁端部は面をなし，端面は外傾する。内面を撫で，口縁部内外面を横撫でする。体部と底部の外面は調整せず，粘土紐接合痕跡を明瞭に残している。口径20.5cm，高さ14.6cm。50・51は内面を撫で，口縁部を横撫で調整するだけの小形の器である。模型土器ででもあろうか。

r. 竈(67・68)　上すぼまりの円筒形体部の下半を1ヶ所方形に切りとって焚口としたもので，焚口の周囲には高さ約5cmの粘土板を貼り巡らせて廂としている。内面を撫で，外面を刷毛目で調整する。廂の前面は刷毛目で調整するが，背面は撫でで調整する。約5個体あるが，完形に復原できるものはない。また，このうち煤が付着して使用したことの明らかなものは1個体で，他には煤が付着しない。底径約23cm，体部の高さ約27cm。

s. 甕A(51～66)　丸い体部に外反する口縁部のつくものである。体部外面はすべて刷毛調整する。体部内面には，不調整のもの，撫でで調整するもの，刷毛で調整するものがある。口縁部の外面はすべて横撫でで調整するが，内面には刷毛で調整するものがある。法量によって，AⅠ～AⅤの5種類に分類が可能である。このうち，AⅠ・AⅡにのみ，体部中ほどに一対の三角形折曲把手がつく。

須恵器　須恵器には，杯A・杯B・蓋A・蓋B・皿B・鉢A・壺A・壺B・瓶・甕がある。

a. 杯A(73・74)　平らな底部に外傾する口縁部のつくもので，口縁部には端部が丸く直に開くものと，縁部が屈曲して外反し，端部内側の突出するものとがある。底部外面は篦切りののちに撫でで仕上げている。

b. 杯B (72)　平らな底にやや内弯ぎみの口縁部のつくものである。高台は貼り付け高台で，やや高く，外端部が突出する。底部外面は篦切りののち撫でで仕上げる。底部外面に「女」形の焼成後の篦刻がある。

c. 蓋A (71)　偏平な宝珠つまみのつくもので，丸い頂部に垂直な短い縁部のつくものと，平坦な頂部に屈曲する縁部のつくものがある。頂部外面は篦切りののちに撫でで仕上げる。

d. 蓋B　いずれも縁部破片である。平坦な頂部に垂直な長い縁部のつくもので，縁端部内側が突出する。頂部外面を篦削りで調整し，頂部外面には自然釉が付着する。

e. 皿B (76)　平らな底部に外傾する短い口縁部のつくものである。口縁部は外傾し，端部は丸い。高台は付け高台で幅狭く，端部は平らである。

f. 鉢A　鉄鉢形の土器でいずれも口縁部破片である。端部は平坦で内傾する。外面を篦磨きしている。

g. 壺A (77)　わずかに外反する短い口縁部と無花果形の体部からなる。高台は長く，外へ張り出す。体部下半の外面を篦削りし，肩部外面には自然釉が付着する。

h. 壺D (75)　肩部の直線的に張った低い体部に外反する広口口頸のつくものである。口縁端部が上方に突出する。高台は断面が矩形で低い。

i. 瓶(78～87)　肩部が丸く器高の低いものと，器高の高いものとがある。85は肩部が角ばったもので，肩部に1条，体部中ほどには3条の沈線を施しており，体部下半以上には灰緑色の自然釉がべったりと付着している。86・87は肩部に一対の耳のつくものである。耳は欠失しており，形は不明である。

墨書土器　井戸2から墨書土器が3点出土している

a. 「部」・「部」　須恵器瓶の底部外面と体部外面下半の2ヶ所に，底部を上にした方向で同一字を墨書したものである。

b. 「□□」　土師器の杯または皿の底部内面に墨書したものであるが，破片でもあり，判読できない。

c. 人　面　土師器鉢の体部外面に眉・目・口を描いて人面としたものである。背面にも同様の人面を描いている。

土　馬　1は，断面U字形の短い胴部に垂直な頸頭部と細い脚のつくもので，尾は斜上につきだす。胴部に馬具の表現を欠く。頸部に粘土を貼りつけて耳と頭部を作る。顔面には直径0.6cmの竹管を押しつけて目をあらわすが，鼻孔はない。総高15.7cm，現存体長13.8cm。

3は，頭部の破片である。頸部に耳と頭部とを貼りつけ，顔面には直径0.5cmの竹管を押しつけ，目と鼻孔を表現している。

B．土壙出土土器

6ヶ所の土壙から土師器と須恵器を得た。このうち須恵器はきわめて少なく，土師器が大部分を占める。各土壙出土土器は，器種，製作手法，年代を同じくしており，ここでは一括して

報告する。これらの土器群の年代として天平末年頃を与えることができる。

土師器　土壙出土の土師器には，杯A・皿A・皿C・椀C・高杯A・鉢A・鉢X・横瓶がある。井戸出土土器に比較して，器種の変化に乏しいこと，とくに甕A・竈がなく，すべて供膳形態に限られることが，土壙出土土器群の特徴である。また，皿C・椀C等の場合，同一器種の土器が上下に重なって出土した。遺存状況は良くなく，赤褐色を呈し，質のもろいのが多い。しかし，器面の遺存は良好で，手法の観察に耐え得る。使用痕跡は明確でなく，井戸出土土器と同様，未使用品であろう。

a.　杯AⅡ(101～104)　口縁部が屈曲し，端部を内側に巻き込むものである。a手法で作り，すべて底部外面に木葉痕をとどめる。内面の底部に2重の螺施暗文，口縁部に1段の放射暗文を施す。口径21.2cm～19.4cm，高さ4.0cm～3.5cm。

b.　杯AⅢ(105～109)　口縁部が屈曲し，端部を内側に巻き込む。すべてa手法で作り，105・107・109の底部外面に木葉痕をとどめる。2重螺旋暗文＋1段放射暗文を施す。口径17.8cm～17.0cm，高さ3.3cm～3.2cm。

c.　皿AⅣ(117～120)　端部を内側に巻き込んだもので，口縁部の屈曲の強いものと弱いものとがある。a手法で作るが，底部外面には木葉痕はない。2重螺旋暗文＋1段放射暗文を施す。口径15.3cm～14.8cm，高さ2.9cm～2.8cm。

d.　皿AⅠ(131～133)　平らな底部と屈曲する口縁部からなり，端部は内側へ巻き込む。すべてa手法で作り，底部外面に木葉痕をとどめる。螺旋暗文＋1段放射暗文を施す。口径24.5cm～21.8cm，高さ3.0～2.5cm。

e.　皿AⅡ(110・111)　端部の薄く外反するものである。a手法で作り，2重螺旋暗文＋1段放射暗文を旋す。口径17.6cm～17.0cm，高さ3.0cm～2.9cm。

f.　皿AⅢ(112～116)　口縁部が屈曲し，端部を内側に巻き込んだものと，端部が薄く外反するものとがある。いずれもa手法で作るが，底部外面には木葉痕がない。2重螺旋暗文＋1段放射暗文を施すが，暗文のないものもある。口径15.5cm～14.7cm，高さ3.0cm～2.6cm。

g.　皿C　(134～136)　底部のわずかに丸い小形の皿である。内面を撫で，口縁部を横撫でで調整するが，以下の外面は調整しない。口径12.5cm～10.6cm，高さ2.6cm～2.4cm。

h.　椀C(121～130)　口縁端部の外反するもので，端部内側がわずかに凹むものがある。口縁部上半を横撫でし，以下の外面は調整しない。口径14.6cm～13.6cm，高さ4.6cm～3.9cm。

i.　高杯A(140・141)　脚部破片である。140は脚の短いもので，裾部を横撫でしたのち脚外面を篦で削って10角形に面取りしている。脚内面上半にはしぼり目が残るが，以下は篦で裾端部まで削る。141は脚の長いもので，裾部を横撫でしたのち，脚部を篦で9角形に面取りする。棒芯を用いて脚部を成形したもので，脚部内面下半を裾端部まで篦で削って仕上げる。裾外面には4区割りの篦磨きを施す。

j.　鉢A(137・138)　平らな底と内弯する口縁部からなり，端部は内側に巻き込む。端部以下の外面を篦で削って調整し，外面全体に3区割りの篦磨きを施す。口径11.6cm，高さ5.0cm。

k.　鉢X　(139)　丸い体部と外反する口縁部からなる小形の器である。口縁部内外面を横撫でし，以下の体部外面は調整しない。口径9.9cm，高さ5.9cm。

l.　横瓶　(142)　須恵器の横瓶を模した小形の器である。口縁部は短く直立する。口径3.6

cm，長径，8.4cm，短径7.2cm。

須恵器　　土壙からは杯Ｂ１個体と甕の破片数点が出土したのみである。

a.　杯Ｂ（142）　平らな底部と直に開く口縁部からなり，口縁端部は外反する。高台は方形断面で，端面は外傾する。底部外面を篦切りののちに撫でで仕上げる。口径19.8cm，高さ6.0cm。

土　馬　　２は井戸出土の土馬１と同様の土馬である。総高14.2cm　現存体長5.6cm。

4.　まとめ

前川遺跡は，河川改良工事中に発見された遺跡であり，応急的な調査しか実施できなかったため，遺跡の性格については不明な点が多い。ここでは主に出土土器をまとめておきたい。

前述したように，井戸出土土器と土壙出土土器は形態・手法を同じくしている。これらの形態・手法はまた，平城宮跡６ＡＡＢ区で検出したＳＫ820出土土器と共通している。これらから，前川遺跡出土土器の年代については，天平末年頃ということができる。

前川遺跡の土器群と平城宮跡土壙ＳＫ820の土器群とを比較すると出土器種に差がみられる。すなわち，平城宮跡土壙ＳＫ820では土師器17器種（杯Ａ・Ｂ，椀Ａ・Ｃ・Ｄ，皿Ａ・Ｂ，蓋Ａ・Ｂ，高杯Ａ，壺Ａ，鉢Ａ，把手付有孔大形蓋，甕Ａ～Ｄ）・須恵器19器種（杯Ａ～Ｄ，椀Ａ，皿Ｂ・Ｃ，蓋Ａ・Ｂ，鉢Ａ，壺Ｂ・Ｅ・Ｆ・Ｈ，平瓶、浄瓶，甕Ａ～Ｄ）がある。これに対し前川遺跡では土師器14器種・須恵器12器種であり，器種が少なくなっている。両者を比較して特徴的なものは土師器杯Ｂである。この土器はＳＫ820土壙にかぎらず平城宮内では普遍的に存在するが，前川遺跡では一点も出土しない。このように両遺跡を直接対比することには多少難点もあるが，前川遺跡出土土器群の性格の一端は判明しよう。

前川遺跡の位置は，遺存地割などから復原される九条大路の路面敷内にあたり，検出遺構を坊内の居住地域に伴う遺構群であると考えることはできない。井戸・土壙などから多くの土器が出土するが，土壙では同一器種が重なって多数出土する傾向がみられた。これらの土壙は，径１ｍ内外，深さ0.4ｍ内外の小規模なものが多く，また遺物の出土状況からみても，土器を廃棄した土壙とは考え難い。むしろ路面敷上に遺構が存在すると考えられる点や，遺跡が京の南端・羅城門に近く位置する点などから，祭事に関連した遺跡の性格を想定しておきたい。

前川遺跡の性格についてはなお不明な点が多く，今後の周辺地域の調査に期待するところが多い。また井戸中から大量の土器類を出土する遺跡も増加しつつあり，前川遺跡の性格の究明もさほど遠いことではなかろう。　　（吉田恵二）

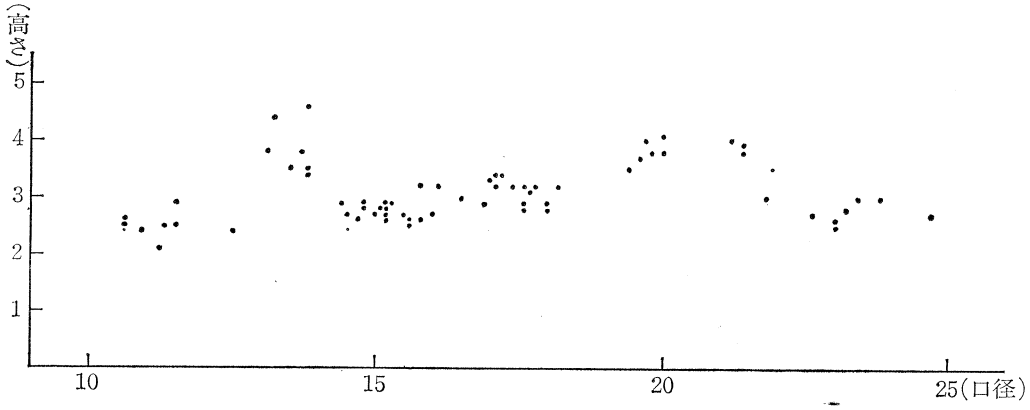

Fig. 13　前川遺跡土師器法量図